おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和７(2025)年
４月号
通巻 656 号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和７年４月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

大倭安宿苑前の満開の桜　　上野剛史さん撮影

再録　『月刊キブツ』昭和47年10月号より

社会福祉の原点

法主　矢追日聖（満60歳）

半世紀以上も前に法主が執筆された記事をもう一度再録すると共に、大倭安宿苑の現状を矢追明昌さんにお願いして紹介することにしました。法主の社会福祉への深い思いを皆さまに味わっていただければと思います。
（編集部）

去る八月五日、Kさんから「福祉」について何か書いてほしいとの依頼状が届いた。今の私にはペンを持つ時間が殆ど(ほとん)ないので逃げたいのが本音であるが、彼から声をかけられると気持ちのどこかにいつまでもそれが残る思いがするので、仕方なく自分の気がかりの念を消滅するために、つまり自己救済のため、彼の要求に応えることにした。

考えてみれば私の精神的構造は宗教人に仕組まれているようだ。白髪になった現在それははっきり言えるのである。私は多くの人間関係をもっている。類をもって集まるのかも知れないが、彼等の殆どは人生は幸福でありたいと言う。換言すれば喜びをもった心で生涯を暮らしたいと言うことである。ところが現実はその祈りとは正反対の方向に動いている場合が多いのに気がつく。

宗教人の宿命は、社会の総て(すべ)の人々が、その人に相応した個人の人間形成の問題や個人家庭の幸福、更に拡大して福祉社会の実現などを祈ることを基盤として、その方向へ世の人々を一人また一人と神のまにまに教化指導するところにあると私は信じている。けれどもう一歩前進し

て、現代社会の経済体制の中で個人家庭をもつ人々が、自衛本能を極度に強化する時代に、自他の幸福を真心から祈り得る人が果たして今の世にあるのだろうかと考えたくなる。宗教人を自任する者は、まず自ら福祉社会構成員の一員たり得る人格を身につけることが先決問題と思う。

相互扶助的な相関関係をもつ社会の中で生かされている私は、常に自分の生涯を喜びをもって暮らしたいと念願してきた。然し事実はそううまくゆかない。協同体的な現代社会から自分一人を切り離して、自分だけが幸せに暮らせる方法はないものかと言った愚痴を、若い頃何回か繰り返したものだ。何時か知らないが、そうした逃げる態度から踵を返して、社会と四つに組む中から自分の幸せを見出すようになった。恐らく十八歳ごろだったと思う。爾来、私はものの総てを前向きに考え行動するようになった。と同時に一身上に起こった総ての事柄は、殆ど自分以外の人にその責任を押しつけない人間になることができたのである。無限大なる幸せを加美（自然）から賜ったわけである。大倭紫陽花邑は私個人の思いが形として顕現した地域的福祉社会である。言わば私の心の影でもある。

福祉の本質

終戦直後は福祉国家建設、最近になって社会福祉と言った言葉をよく聞くようになった。誠に有難い傾向と思うが、人々は果たして福祉の本質を分かっているのかどうか疑いたくなる。福祉とは幸福やさいわいという事で、字の読める人なれば誰でも理解できる。辞典では消極的には生命の危急からの救い、積極的には生命の繁栄と、宗教的な解釈もしている。

資本主義国家では、完全雇用社会保障政策によって、全国民に対して最低生活の確保と物的福祉増大をはかることを目的とした経済体制をとっている。そこで国民の最低限度の生活を保障するため、貧困者には生活に保護を加えたり、公衆衛生や共同募金などの事業を公的に行っている。それには生活保護法、老人福祉法、児童福祉法、身体障害者福祉法などがあり、法の定めにしたがって、国または地方公共団体がそれを行っている。また社会福祉事業法によって設立された社会福祉法人は、福祉施設を設置運営するというように、福祉施設としての仕組みは整然とできている。勿論これは薄い行政上の問題であるが、社会福祉はかなり厚い層をもつものと私は考えている。

人々は本質的に、誰もが幸福感に満ち足りた生活を望んでいると思う。世に言う幸福感は、自分の思惑通りの結果が現実化したときの、喜ぶ心を指しているように私には見える。とすれば幸福感は断続的に繰り返すもので、悩みの相対的な一時的現象に過ぎないと言える。真の幸福感は永続的なものでなければならないと思うのである。

人間には個人差がある。然し総ての人々は事実、大自然がもつ各種の条件（加美の恵み）によって生かされているため、生きる方法については人それぞれの工夫があり、相異なった方向に動いている。自分の思いに適った衣食住を確保したいという欲求だけは、多くの人々に共通する目的のようである。この中に異性間に起こる愛憎の葛藤、物質的金銭的からくる利害関係、権勢欲と権力者への隷属、優越感に毒された権威者への憧れが、病患の苦悩など、喜怒哀楽が織りなす人間模様を画きだし、諸行無常の風に吹かれながらのこの世を果てるのが、人生の定められた宿命のようだ。人間は一生幸福でありたいと願いながら、何故、横道にそれてわざわざ不幸の淵へ落ちなければならないのか。これが肉体をもち、この世だけの心の世界のみに生きる人間の常道であるのかも知れない。

終身保障の地域社会

本年三月一日付をもって、奈良市は通称町名「大倭町」を設定した。現在この町内に居住する者は大倭紫陽花邑の邑人だけである。この邑は古都奈良の右京の西はずれで、緑と起伏の山あいの中、しかも宅地造成の近代化されつつあるその真只中に在りながら、古代の匂いをただよわせて横たわっている。奈良、大阪を結ぶ幹線、阪奈道路を挟んで奈良国際ゴルフ場がある。そのクラブ・ハウスの南隣接地の杜がこの邑の所在地に当たり、約一万坪たらずの地域がある。

現在みるこの邑は、もとを質せば矢追日聖という個人家庭に端を発し、それに二十五年という歳月の積み重ねと、家族邑人全員の真摯な努力とが相俟って今日に至っている。

私個人の家庭を今も「大倭一門」と称しているが、その家族数は平均して五十名前後を保っている。この一門家族は言うまでもなく一つ財布に一つ釜で、現代流に言うならば、世にも稀な終身保障の地域社会と言える。組織をもつ制度ではないので、勿論、終身保障に対する家族への何ら義務づけする類の定めはない。人々はこの家族を共同体と称しているようだ。ほかに隣保家庭と称するものが邑内に十数世帯ある。これは財布だけは一門と切り離しているが、それ以外のことは一門と変わりない。

また宗教法人大倭教（全国）、宗教法人大倭大本宮（地方）、社会福祉法人大倭安宿苑、奈良県

立菅原園、大倭殖産株式会社、大倭交商株式会社、交流の家など、多色彩なものが調和の姿を保ちながら各々その主体性を十分に発揮しつつこの邑の空気で生きている。

申すまでもなく共同体と見られている大倭一門は、この邑否大倭教（神ながらを基盤にもつ宗教）の母胎であり、この邑の中核をなしているが、それは宗教的信仰的な集いでもなければ、社会福祉的慈善的な救済集団でもない。無計画の計画により、組織なき組織で形は造られ、無統制の統制によってその動きを示しているのである。

強いて言うならば、わが一門家族は、お互いが死ぬまでの苦悩を出来る限り少なくするように努めながら、家族達は相互扶助の心で結び合って、墓場へ近づくその日その日を楽しく暮らしてゆくという、世間並の単調な生活体に過ぎないのである。本質的な社会福祉の原種はこうした中に埋もれているのではなかろうか。

多色彩の調和

人として生きる者は、誰でも飯を食べ、クソを垂れなきゃなるまい。であればクソを造る材料は自分で稼ぎ獲得しなければならない。ここまでは動物共通の基本的なものであるが、こんなことの繰り返しのままで、万人が否一人も漏らすことなく絶対に到達しなければならない崇高な「死」を迎えるとすれば、単なる動物的製糞機で終わるとすれば、人間としての生甲斐や楽しみは無くなってしまう。私には耐えられないものがある。それ故に私は加美の仕組みに対し、私心なく順応することが生涯の本質的享楽と自覚し、身に体して今に至った。

ここで言う本質的な楽しみは、世に言う清濁併呑である。私は雑多な人間のもつ諸問題が醸している、つまり普通の人が苦にするような事柄でも素直に受け入れて、その綾なす変化に楽しみを見出しているのである。苦から逃がれて楽しみを得るというのではない。加美は一切のものを「顕幽不二」「愛憎一如」のように相対的にして一体的に仕組んでいるから、私はこの根元なる加美の摂理を知り、それに触れ、それをわが心に納めるためには、永い歳月の間、血の出る思いで実践を通し、不完全ながら私の宿命の範囲だけは体得してきたつもりである。大倭一門という集団家庭は、こうした心の基盤から終戦を契機として自然に生まれ出たものである。何かの理想を画き、人智の限りを絞って造り出したものでは無いことを、私から言明しておきたい。

今この邑に居住している人は約三百人に達している。折にふれて思うことだが、ようもまあ！こんなに顕著な特徴をもつ人間が、よりにもよってこの邑へ集まって来たものだ、とても人間業とは思われないものがある。見方を変えて言うならば、生涯退屈せずに楽しめるオモチャを加美様が私に与えて下さったものとさえ思える節がある。

加美は、花一つでさえ数知れない種類を作っている。もし、地球上がただ一色の花で満ち満ちていたとすれば、花を見る感覚は砂漠を見るに等しいものがあるであろう。大倭の邑人の中には、私に反抗する者や盲信的追従者もある。また、私を宗教人や社会事業家と見る者や、邑の最高権力者と見ている者もある。私個人の中にそのように見える多くの要素が内在しているとすれば、私は恵まれた人間として誠に有難い。たとえ人が何と言っても、私は私である。もし多色彩が調和を保つ、加美の摂理に添う大倭紫陽花邑であるならば、私が生存する限り否死後にあっても、この邑は盤石の構えを見せながら、神のまにまに転化の道を歩んでゆくものと、私は信じて疑わないのである。

宿縁の地

ここ大倭の地はもと須加宮といい、聖武天皇の皇后に立った藤原安宿媛（光明皇后）幼少の頃からの宮宅地であり、ここは悲田院、施薬院の旧蹟だと伝えられてきた。言わば日本に於ける社会福祉事業（昔は慈善事業）発祥の地となる。ただしこの問題に関しては、歴史的裏付けをする資料は今のところ大和では見つかっていない。私は歴史的な問題は論外として、こうした尊い伝承のある土地で、悠久千有余年来埋もれていた皇后の心を、今の世にこの縁深き須加宮の地で再現することの重要性を痛感するものである。私は昭和二十二年からこの地で、姿なき女性光明皇后と肉体をもつ私が、家族の形で同居しているのである。皇后には多くの家の子がいるので、私は毎日を賑やかに暮らすことができる。

地下水の如く　清く流れ
紫陽花の如く　美しく咲け

は、皇后が紫陽花の一輪を見せて、私に示された言葉である。これは現界に居る私に対し、霊界から彼女の宿願を託されたものと私は受け取っている。

昭和三十年だった。皇后の慈善博愛の強き思念や私がもつ「神ながら」信仰、それに加えて終戦から十年にわたる社会情勢の変革、邑の転化等多くの条件が一丸となって、社会福祉法人大倭安宿苑がこの宿縁の地に誕生し、同三十一年から発足を見るようになった。

当初は「身体上又は精神上、著しく欠陥があるために、独立した生活を営むことができない人々に生活保護を行うことを目的とする」（生活保護

法）救護施設須加宮寮で、この種の施設は奈良県下では最初の設置であった。発足時の入居定員は三十名だったが、今は百名に増員している。

次いでそれから十年を経過した昭和四十一年には、特別養護老人ホーム長曽根寮が新設された。ここは六十五歳以上の者で「身体上又は精神上、著しい欠陥があるため常時介護を必要とし、かつ居宅においてこれを受けることが困難である人々に対して養護することが目的である」（老人福祉法）と定められている。

更にこれらの福祉施設に隣接して、昭和四十五年に奈良県立菅原園が設置された。勿論、大倭の福祉法人が受託運営する約束があったからでもある。もとは重度肢体不自由者更生援護施設だったが、今年度の法の改正に基づき「身体障害者療護施設」に改められた。定員は五十名、本年四月からの発足にて、全国四ケ所の一つである。この種の施設は「身体障害者であって、常時の介護を必要とするものを収容して、治療及び養護を行う施設とする」（身体障害者福祉法）と定められているのである。

このように大倭にある三福祉施設は各々特殊性をもっているが、共通するところは、この三施設に入苑している人々は、ここが終生の生活の場であり、終焉の地でもあると言える。更生して社会復帰の可能な者はこの施設へは来ないようになっている。それがためこの施設で暮らす二百人の住苑者に対しては邑人として扱い、この福祉事業に従事する職員達も、介護の任に当たる家族の立場をとっているのである。

楽しんで日々の精進を

私は十六年間、大倭の福祉施設を育てて来た（精神的に）が、法に基づいての運営であるからそこには幾多の問題点はある。然し私は大倭の施設へ入苑する以前の住苑者の家庭を眺めるとき、そこに重要な幾多の社会問題が個人家庭の中に押しつぶされて潜んでいる事実を知って、ひしひしと身にこたえるものがあった。

これと同時に最近の福祉施設の在り方と言えば、肝心の福祉精神を忘却して福祉事業に専念する傾向が特に顕著になってきた。建造物の優劣を競って、より豪壮なものへと変移してゆく現象は、端的にそれを物語っているようだ。施設で働く職員達、特に介護の任に直接たずさわっている保母や寮母達の待遇の向上を図ることも有難いことだが、またその反面、施設運営の上から職員の辞職を恐れて手のかかる入園者は体よくこれを避けるという利巧さ、こうした事実を見るにつけ、思うにつけ、一入悲しみの切なるものがある。広く社会福祉の立場から見れば、福祉施設はその一部分の存在に過ぎない。しかるに年と共に高額な公的費用を投入して、こうした各種の施設が全国的に増設されつつある現状のようだ。あたかもそれは犯人逮捕にのみ囚われて防犯を軽んじ、治療にのみ専念して予防を忘れるの類に等しいのである。

社会福祉の原点は社会的連帯性をもつ各家庭の中になければならないと考える。もし総ての家庭が経済的基盤を確立し、家族達は相互扶助の心をもって仲良く調和が保たれたとすれば、そこに自から立派な福祉社会が生まれるのは理の当然と私は思う。然しこれは永遠に実現不可能な単なる空想に終わる事実を、われながら認めざるを得ない。哀愁の限りである。

私個人は世にも稀な恵まれた人間の一人である。それは加美のお蔭で私は安心した「死」につける大倭紫陽花邑の舞台が与えられたからである。この喜びを私は命の果てるまで、気の向くままに、宗教活動や社会福祉の面で広く社会へ還元する覚悟のもとに、楽しんで日々の精進を続けているものである。

（昭和四十七年九月四日）

大倭の福祉施設の流れと現状について

社会福祉法人 大倭安宿苑 常務理事　矢追明昌

矢追明昌常務理事

大倭編集部の岸田さんから原稿依頼があり、テーマは「大倭安宿苑の現状について」ということでした。

昭和47年に矢追日聖法主さん（以下、法主さん）が書いた文章の中にある社会福祉法人大倭安宿苑（以下、大倭安宿苑）がその後どうなっているかを書けばいいのかなと勝手に解釈して筆を、いや指をすすめます。岸田さんごめんなさい。

その法主さんの文章（※「社会福祉の原点」）は、霊界のことや自身の考え方などを織り交ぜた、俗っぽいようで軽妙洒脱且つ意味深いものでしたが、私はいわゆる霊感や文才は受け継いでおらず、ただの大倭安宿苑の沿革になってしまうだろうことを免罪符がわりに冒頭でお詫びしておきます。

法主さんの文章では、法人設立と同時の須加宮寮、長曽根寮、菅原園が出てきました。復習になりますが、昭和31年5月10日に大倭安宿苑が法人として成立し、その一週間後の17日に救護施設須加宮寮が事業を開始しています。そして私が生まれた翌年の昭和41年7月1日に特別養護老人ホー

ム長曽根寮が事業を開始しました。今は亡き私の父親はこの長曽根寮で働いていましたので、子供のころは施設が遊び場のようでした。今では考えられないことです。

次いで昭和46年1月1日に肢体不自由者更生施設奈良県立菅原園（受託経営）の事業を開始しています。その翌年、昭和47年7月1日に身体障害者福祉法の一部改正に伴い、施設種別が身体障害者療護施設に切り替わりました。ここまでが復習的な内容になります。

その大倭安宿苑の原点である須加宮寮は1回目の建替え工事が行われ、昭和56年3月25日に無事竣工しました。

その次の建替え工事は長曽根寮で平成7年11月27日に竣工しました。この時にショートステイやデイサービスといった在宅サービス、そして長曽根寮の併設施設として軽費老人ホームケアハウス八重垣園（平成7年12月1日事業開始）も同時に整備されました。皆さんご存じと思いますが、法主さんが大倭安宿苑理事長として現界の大倭安宿苑での大きな仕事はこれが最後でした。その特別養護老人ホーム長曽根寮は平成12年4月1日介護保険法による指定を受け、指定介護老人福祉施設となりました。それまでは市町村が決定する措置でしたが、原則として利用者と施設（法人）との契約により利用する施設となったということです。

長曽根寮デイサービス敬老会

それは障害者の施設も同じ流れで平成15年4月1日に菅原園が支援費制度による指定身体障害者療護施設となりました。介護保険制度と同じように契約により利用する施設となりました。その直後で菅原園での大きな出来事として、奈良県による2期工事で建替えを進められていたのですが、平成18年4月1日竣工と同時にその新しい建物が奈良県より大倭安宿苑菅原園に移管され、施設名から「奈良県立」という表示がはずれたことにより名実ともに運営をしていくことになりました。

時を同じくして平成18年4月1日、奈良市からの受託事業として奈良市富雄地域包括支援センターの運営を開始しました。介護保険法に基づいていますが、現時点の奈良市ホームページの説明では、「地域包括支援センターは、高齢者が住み慣れた地域で安心してその人らしい生活を継続することができるよう、ご本人やそのご家族、また、地域住民の身近な相談窓口として、保健・医療・介護・福祉など様々な面から包括的な支援を行う地域の中核機関になります。奈良市では、市内を13の日常生活圏域に分け、それぞれの圏域に1ヶ所ずつ、担当する地域包括支援センターを設置し、社会福祉士、保健師、主任介護支援専門員などの専門職が相談支援を行っています」となっています。また同じセンター内で介護予防ケアマネジメントを行う介護支援専門員（ケアマネジャー）も業務を行っています。

法主さんの帰幽後、矢追美壽紀現理事長になりましたが、その最初の施設整備が、平成20年4月1日に事業開始した軽費老人ホーム特定施設入居者生活介護ケアハウス茂毛蕗園の新築工事でした。同じケアハウスでも八重垣園はほぼ自立された方を対象にしており、介護が必要になった場合は退園していただかざるを得ませんでした。それらご利用者やご家族から介護が必要になっても同じ施設で暮らしたいという願いを実現するために、介護が必要になっても暮らし続けていける施設として現理事長が産み出したものです。

菅原園でのヨーヨー釣り

もしかしたら覚えている方もあるかもしれませんが、この茂毛蕗園という施設名は以前に奈良市から受託事業として痴呆性老人託老ホーム（当時の表現です）を経営していた時の施設名です。法主さんが名付けたものなので、受託終了してからまた使わせてもらおうと考えていました。

制度に基づくとはいえどんな種別の施設なのかわかりにくくなったのですが、平成24年3月1日に菅原園が新体系に完全移行し障害者支援施設となりました。ご利用者については心身に障害のある最重度の方々を中心にご利用いただいていることに変わりありません。

先ほど自立型の施設としていた八重垣園ですが、平成27年4月1日に介護保険法による特定施設入居者生活介護の指定を受けて介護の提供ができる施設にしました。これで茂毛蕗園と併せて2カ所の特定施設入居者生活介護ケアハウスを運営していくことになりました。

奈良市富雄地域包括支援センターにおいては平成29年4月1日に担当圏域変更に伴い奈良市富雄東地域包括支援センターと名称変更となりました。今までの担当圏域が奈良市により2分割された結果でした。

最近での大きな動きの最後は平成29年8月5日に2回目の須加宮寮新築工事が竣工したことです。その時には、建替え用地として直ぐ近くであ

る菅原園東側の田んぼや畑を取得することにより、ご利用者にほとんど不便をかけることがなく建替えを行い、引っ越しもスムースに完了しました。その建替えと同時に運動場も整備し、行事の時の会場として使用するだけでなく、近隣自治会の方々に開放することにより今まで以上大倭安宿苑に対する理解を深めていただいていると思っています。

大倭安宿苑の理念「あなたも私も仕合わせに」や３つの信条「地下水の精神　心身の健康　相互の扶助」は、大倭紫陽花邑に位置する法人として邑とも共通のものです。以前にご利用者のご家族から、いくら理事長や施設長が良いことを言っていても現場で働いているのは職員なんですよ、というようなマイナスの意味としてとても厳しいお言葉を頂きました。まさにその通りで、職員に理念や信条を唱和してもらうことが目的ではなく、それを日々実践してもらうことが大倭安宿苑を産み出した法主さんの想いに通じていくと思います。

現在の職員総数は約２００名でそれぞれの色があり、紫陽花に例えるならばカラフル過ぎるガクの色合いです。その調和を保ち美しく咲いていくため法主さんを直接知っている世代は、心の地下水をカラフルなガクに流していくことが重要な役割りであると認識しています。

法主さんの時代は制度が法主さんを追いかけていたと思います。現在は大倭安宿苑が制度を追いかけていろいろな面でつまずいたり転んだりして、光明皇后さんの眉間にはしわができていることでしょう。としても、そのしわが少しでも浅くなるよう、少なくなるようこれからも誠実な心持ちでこの福祉の仕事に向き合っていきますので今後ともよろしくお願いいたします。

令和５年６月28日～29日

こもれる魂魄の地を訪ねて（第55回）

屋久島と鹿児島・宮崎の旅（その１）

杉本　順一

私が初めて屋久島を目にしたのは昭和43年の夏。紫陽花邑にKさんという元ハンセン病患者さんがいました。彼の事情で奄美大島にある「国立療養所　奄美和光園」に行くことになりました。

彼の国に対する言い分は「わしが大倭でお世話になると、国はわしに対する責任を放棄してしまう」とのことで、和光園に行くことになったのです。公的には大阪府のライ担当官（当時ハンセン病関係の係官をこう言った）の２人と行く予定だったらしいのですが、Kさんから一緒に行ってほしいと言われ、病み上がりの私も同行しました。

天保山埠頭から出航。船酔いがきついので、３等室の床にへばりついているだけでした。食事は船内放送で知った。昼食中「皆さん右に見えますのが屋久島でございます」と放送がありました。

屋久島との初めての出会いはこんなものです。

屋久島に行かねばならない訳

平成12年11月のことです。その頃詩人の山尾三省さんは屋久島の一湊白川山にご家族で暮らしておられました。三省さんは自分が末期のガンであることを自覚され、その時が来る前にと、大倭紫陽花邑に奥さんや子どもたち家族と一緒においでになり奈良で一泊されました。

会館で私も皆さんと共に雑談の仲間入りをしていた時のことです。何の脈略もなく突然「ヤクシマダイリュウオウ」と名乗り「ミノアルウチニヤクシマニコラレヨ」と私への伝言でした。私にとっては、これはもう半ば強制されたようなものです。霊界さんには時間の約束は出来ませんので、心で覚悟の気持ちを伝えました。

あれから20数年、娘たちもこの話は覚えていたらしく、私がまだ実行していない霊人との約束のひとつを、この旅の計画に入れてくれました。

これが屋久島訪問の目的です

６月28日　９時20分　自宅からタクシーで伊丹空港へ。

11時25分　空港出発。プロペラ機でした。

13時10分　屋久島空港到着。地面に降りて空港建物に入る。いきなり娘たちに、空港が出来る前から暮らしていたであろうクロたち（狸霊）がわんさと出てきたらしい。

娘たちがレンタカーを借りに行ってる間に、私は約束の屋久島大龍王に屋久島訪問のご挨拶をする。法主さんから「コンゴウダイリュウオウトトモニ　ココニイル」と言われた。金剛大龍王さんの御出まし（？）までは考えもしなかった。法主さんが鎮魂・慰霊の旅に共に来ていただいているのは、大倭会の文化行事に参加しておられる方々には当たり前のことなのですが……。

屋久島巡りの計画は細かく決めつつあったが、途中娘たちに「紀元杉の精（霊）」から会いに来るようにと言われたらしく、計画を大きく変更しました。

レンタカーを借りてさっそく紀元杉を目指す。この大杉は、標高約１２００メートルにあり、樹高19・５メートル胸高周囲８・１メートル、推定樹齢３０００年とあります。

６月５日まで北海道の広い道ばかりを走ってく

れていた娘の運転技術が通用しないような急坂で曲がりくねっている道には、同乗している私も緊張の連続でした。やっと紀元杉の前で車を降りて、大樹の回りに設定された階段を少し降りたあたりで、紀元杉の精から声が届いた。「トキノナガサヲ　ミテホシイ」という。大杉をひと回りしたあたりで、携帯で写真を撮っていた娘たちに、白人女性が「皆さんの写真を撮りましょうか」と声をかけてくださった。こんな所にまで遠くから来られているのか、と少し驚きました。

この紀元杉には、ヒノキ、ヤマグルマ、アセビ、ヤクシマシャクナゲ、ナナカマドなど約12種類の着生樹があって樹上で育っているとのこと。

樹の精がいう「時の永さ」を見せてもらった。ゆっくりと大樹のまわりを歩いて車道にもどる。

帰りぎわ「オナゴリオシイ」と感じた気もしたが、それは私の思いが反響したのかもしれない。

15時30分　紀元杉とお別れする。

16時20分　屋久杉自然館に到着。江戸時代に大量につくられた屋久杉の平木（※短冊形の屋根材）は年貢として納められる重要な産物だったとありました。平木２３１０枚の実物をくみあげ、その前に米４斗分が入る俵を形に見せて、価値評価を示してあったので分かりやすかった。

現在見ることができる屋久杉の多くは、加工に不適として切り残された異形の巨木と伐採跡に育った江戸時代生れの小杉の大群とのこと。

17時10分　屋久杉自然館出発。

18時　屋久島空港到着。

19時　空港出発。

19時35分　鹿児島空港到着。すぐに「かごしま空港ホテル」に迎えの車を依頼する。

20時00分　ホテルにチェックイン。

ホテルの向かいに特攻基地「海軍航空隊第二国分基地」の跡地があり、慰霊碑がある。近くに西郷公園もある。すぐに西南戦争（明治十年、不平士族の最期で最大の反乱）を思い出したが、西郷隆盛さんが出てきて、この戦争で亡くなった者たちだけでなく、あの時の家族や一統たちの慰霊と鎮魂を依頼されました。

20時30分　レストランで夕食。食後部屋に戻る。

６月29日　９時30分　ホテル出発。レンタカーでの車中挨拶にて西郷公園、十三塚原特攻記念館を通過する。

高速道路にでて２時間霧島錦江湾国立公園（韓国岳、高千穂峰）の周辺を走る。途中、和気清麻呂（矢追家の一人）の住居跡を通過。

山々を眺めながら走っていたら「カンコクダイリュウオウ」と名乗ってくる龍神さんがあった。ああ、あのお山か、ひときわ高い山が見えた。

西都ＩＣでおりて宮崎市内に入る。

12時　「うなぎ入船」で昼食、しばらく休憩。

13時40分　西都原考古博物館到着。

私にとっては二度目となる西都原古墳の地である。前回は昭和45・６年？の正月。当時大倭印刷の社員だった方のご縁をえて中島康治さんと正月休みを利用して、関西では聞き慣れない「サイトバル」に行きました。社員さんの義弟の青年（私も青年！）に案内された西都原古墳群を見せてもらいました。目の前は一面の古墳群でした。数え切れないほどの古墳の数でした。それが一目で見えるんです。圧倒されました。

そう感じた瞬間、ここは生まれて初めて見た風景なのに、心の奥から異様なくらい物凄い懐かしさに襲われました。あの腹から込みあがってくる懐かしさは、何だったのだろう……。

九州から無事に戻れたことを法主さんに報告に行きました。考古学に詳しい法主さんに「一度西都原に行ってください」と言ってしまいました。

あれから50年以上、再度の訪問ではあの懐かしさはありませんでした。一面に見えていた古墳群も、大きく育った無数の木々のため、風景は変わっていました。今は古墳群を訪れる見学者のために素晴らしい形で人の手が加えられていました。

古代の人達が残していったあの古墳群風景は、今はもう一目で見ることは出来ませんでした。

それでも案内書を見ながら車で回っているうちひと際大きい古墳が寄り添うように二つあり、男狭穂塚、女狭穂塚と名ずけられていました。この塚の霊界人は現界に在る時は皆を導いていたことでしょう。私はそのことを意識してご挨拶。

「初めまして」と言うと「ワタシハマエカラワカッテイマシタヨ」と、思わぬご返事。そうか、私にとってもあの50年前の西都原訪問の時が出会いだったのか。「失礼しました」。こんなこともあった西都原行きでした。

16時　西都原考古博物館出発。

17時　ホテルＪＡＬシティ宮崎到着。

19時30分　「ミヤチク」で夕食。

今回の旅行でご縁をあらたにした霊界の萬霊を大倭太加天腹にお迎えする食事となりました。法主さんが「霊界は飯粒一つでも、何万人でも食べられるねん」の一言を信じて。

６月30日　朝から雨の気配を気にしながら、毎朝の龍界へお水を供えての挨拶をする。帰りの飛行機が飛んでくれるか気にしつつ。（さきの北海道旅行中、稚内行きの飛行機が雨で飛べなかったのは、６月２日のことだったので。）韓国大龍王が「トベルヨウニスル」とのお言葉。

お任せするしかない。（その２日後宮崎方面は大雨。飛行機は飛べなかった。）

12時15分　宮崎空港出発　13時50分伊丹空港着。

あじさい日誌

3月8日　午後4時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

3月9日　午後2時から大倭会主催の禊会が大倭拝殿において開かれました。2月は法主帰幽祭のため、禊会は開かれませんでしたので、2カ月ぶりの禊会となりました。

決まったテーマではありませんでしたが、お年寄りの話が多かった気がします。それは話す人もお年寄りだったせいでしょうか……。

3月15日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

3月22日　拝殿の下で春を感じて喜び合っていたら、鶯の初音。初恋の乙女の如し。

3月23日　午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が行われました。この日は昭和40年3月23日の法話をお聞きしました。

3月28・29日　群馬県安中市の櫻井保・節子夫妻と英国在住の次女利香さん、前橋市の内田伸彦・誓子夫妻と長男崇法さんが来邑。岸田哲、杉本順一、高橋良美、林修三さん等と懇談されました。

群馬県安中市から来訪された櫻井さん一家と

3月31日　午後2時頃掛川市の松本直之さん、大城由香理さん、群馬県多野郡の三田淳・茂子夫妻等が来邑され杉本順一さんと懇談されました。

4月6日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。午後3時半ごろひょっこり京都の三宅一家が来邑されました。

午後6時半から邑倭の会が大倭会館で開かれました。

大倭安宿苑では

4月1日　辞令交付式が10時30分より開催されました。今年度は久しぶりに新卒3名の採用もあり、良い緊張感で皆さん辞令を受け取っていました。（菅原園）

4月3日　桜が満開になり、希望された利用者の方々が玄関先や2階のベランダで昼食を摂りました。食後は記念撮影をしたり、散歩したりと桜を楽しむ機会になりました。

4月6日　午後より映画「鬼太郎誕生―ゲゲゲの謎―」を上映。映画館の臨場感を感じてもらえるように、プロジェクターと外付けスピーカーで楽しんでもらいました。（須加宮寮）

3月18日　昼食時、ホットプレートでお好み焼きを焼きました。お好み焼きは人気のメニューなので、皆さん喜んで食べていました。

4月1日　須賀の道の桜が綺麗に咲いていたので、花見散歩に行きました。桜をみて、「きれい」と喜んでいました。（長曽根寮）

3月17・20日（デイ）　作品づくりでチューリップ飾りを作りました。

3月31日・4月1・5日（特養）　玄関前やフロアのベランダから桜の鑑賞を行いました。（茂毛蕗園）

3月14日　ホワイトデーでクッキーを男性職員から入居者に手渡しして、雰囲気を味わってもらいました。

4月1日　茂毛蕗園創立17周年記念日で、昼食は豪華創作料理でお祝いしました。

「神通力如是」メモ

先月号の「神通力如是」第35回で註釈がひとつ抜けていたのに気付かれた方はいると思います。それは源為朝の連れ合いとして「神通力如是」の中に初めて登場した「白縫」という女性についての註釈がなかったということです。彼女に関しては文芸作品の中で語られることはあっても、史実としての記録が見つかりません。そのあたりの事情を次の彼女の登場場面で説明いたします。（三人の会）

第352回大倭会文化行事

京都市神楽岡町吉田山周辺をぶらぶら歩き

日にち　令和7年5月17日（土）
（今回は土曜日ですのでご注意ください）

集　合　京阪電車出町柳駅 改札口 午前10時30分

交　通　近鉄学園前9:09発 近鉄奈良線（急行）奈良行→大和西大寺 9:12着、9:17発 近鉄京都線（急行）国際会館行に乗換→近鉄丹波橋 9:45着、9：56発京阪電車(特急)出町柳行に乗換→出町柳10:10着

行　程　出町柳駅から徒歩10分程で吉田山界隈に到着。周辺の金戒光明寺（黒住）宗忠神社等に行きます。

連　絡　林　修三　080-2527-0840

予　告　第353回 秋の一泊文化行事（定員28名）
10月19日（日）・20日（月）
四国の白峯御陵と道後温泉への旅

あんない

＊月次祭（大倭神宮）
5月6日(火・振)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会
5月11日(日)　午後2時より大倭拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）
5月15日(木)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大倭大本宮）
5月23日(金)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼今回の記事「社会福祉の原点」には特別な思い出があります。当時私は『月刊キブツ』の編集部で仕事をしていました。社会福祉についての特集を組むことになり、真っさきに大倭紫陽花邑の矢追日聖さんに原稿をお願いすることを思いつきました。しかし、当時の私は法主さんに一度しかお目にかかったことがないしお忙しそうだから、とても無理だろうと考えたのですが、意を決して長い依頼文を書きました。しばらくして承諾のご返事を頂いた時には仲間と喜び合ったのを昨日のことのように覚えています。その私が今度は『おおやまと』の編集者としてその記事の再録に関わっているのも不思議なことです。（岸）